

# 学習のまとめ

## 13

### 目標

- ・ 学習を振り返り、講座のコンセプトを改めて確認する
- ・ レポートを提出する前のチェックを行い、不明な点があれば質問する

### 読む 講座のコンセプトを確認する

13-2 この授業のコンセプトは、Unit01 から Unit03 にかけて説明していますが、それ  
13-3 らの内容を改めてここで思い出してみてください。この授業もまた、みなさんが後半の学習でとりこんできた共通テーマと同じように、「多様な学習者一人ひとりの学力を高めるために」どうすればよいかということテーマとしてデザインしています。とりわけ学習の評価については、これまでの日本の学校教育における考え方と大きく異なっています。

### チーム学習 チーム内で最終レポートをお互いにチェックしあう

13-1 これまでの2回のチーム発表と、2回のショートレポートの提出によって、最終レポートの執筆も進み、完成に近づいていると思います。学習支援システムへの提出期限までに不足なところを修正できるように、チーム内でチェックリストを利用してお互いに確認しあいましょう。また、これまでの資料を確認し、かつチームメンバーに質問しても解決できなかった疑問点があれば、指導者に質問してください。



Web 公開

- ① 掲示板などでレポートを公開する期限日をチーム内で決めます。
- ② 一旦まとめた最終レポートと、12-2の項目Fのチーム学習実践力の5つの目標とそれぞれの自己評価の数値を掲示板などで公開します。
- ③ 公開された他のメンバーのレポートを読んで、「13-1 チェックリスト」で示されている項目ごとに決められた記号をつけます。また、同メンバーが公開したチーム学習実践力の自己評価についても同様に、それぞれの項目に決められた記号で評価する。それらをまとめて掲示板に書き込んでフィードバックします。
- ④ 集まった評価を自分で13-1にまとめて、一覧できるようにします。これを最終レポートの改善点として本文に反映させ、十分納得のいくように整えてから提出しましょう。



Web 提出

### 最終レポートを提出する

## 注意と確認



### はやめの提出を心がけること

提出者が集中すると、うまく提出できないこともあります。少し早めに提出するようにしてください。



### 無事提出されたかどうかを確認すること

レポートを提出したはずなのに提出されていなかった、あるいは提出されたかどうか心配になる、といったことも考えられます。提出ミスを防ぐためにも提出が済んだか必ず確認しましょう。



### トラブルがおきた時は連絡すること

なんらかのトラブルで提出できなかった場合は、名前と提出できなかった理由とすぐつながる連絡先（携帯のアドレスが望ましい）を記載した上、担当者のメールアドレスまで添付ファイルで送ってください。



### レポートを読み直すこと

13-1 レポートチェックリストで指摘された改善点がクリアしているか、特に表紙に必要な情報が打ち込まれているか確認してください！12-3 要参照



学籍番号(半角)-チーム番号(半角)-氏名(全角).doc

### ファイル名を確認する

# レポートチェックリスト


 チーム学習

- 掲示板などで公開したレポートの評価をここにまとめます

チーム番号( ) 月 日( ) 氏名( )

## 目標レベル

執筆できたところまでのレポートを読み、以下の点をチェックしてください。  
 なお、各リストの詳細については必ず「7-05 レポートの執筆」や「12-3 最終レポートの構成」や「12-4 最終レポートの評価」を確認した上で判断してください。

← 自分が提出するレポートの評価レベル(AA, A, B, C)を左に記入してください

○…できている △…ほぼよいが少し改善を要する ×…検討しなおす必要あり

リスト	評価者							注意点
	例	A	B	C	D	E	F	
講義名, 学籍番号, 学科, 回生, 名前, チーム番号が示されている	○							表紙に記入 12-3 参照
フォントの大きさ(基本 10.5)や字数や行数は規定どおりである	○							40 字×30 行の 1200 字
挿入された図表の割合は適切である。(半分以上の割合は好ましくない)	○							12000 字の 7 割以上が文字であることが望ましい
読みやすく工夫されている	△							文章を長く続けず、段落や小見出しをつくる
10 枚以上書けている	○							表紙や目次は枚数に含めない
参考・引用文献や URL が正確に示してある	×							12-5, 7-05-2 参照
「だと思います」ではなく、「である」調を用いている	×							「ですます」調と「である」調を混合しない
データや論文などを使用して説得力のある文章が書けている	○							考えの根拠が具体的に示されている
目標レベルの条件をクリアしている	×							12-4 参照
表紙に申告レベルと実践力の評価と公開同意書が付記されている	○							12-3, 12-4 参照

## 評価者

	氏名	コメント
例	●●●●	Lv. A を目指しているのに参考文献が最後に示されていないです。
A		
B		
C		
D		
E		
F		

裏もあります

## 「チーム学習実践力」の成長を評価してください

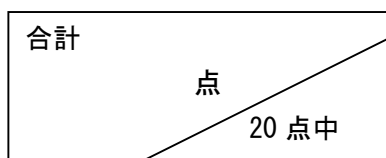
「01-5 チーム学習実践力を身につけよう」で自分が身に付けたい目標を定め、「06-1 チーム学習の評価(個人)」「12-2 チーム学習の評価 2(個人)」の項目 F でその成長を確認してきました。最終的に自分が下した自分の学習についての評価は妥当なものかどうかを、チームメンバーにチェックしてもらいましょう。

- ① まず、以下の表に「12-2 チーム学習の評価 2(個人)」の項目 F から「課題」「目標」「最終」の値を写しましょう。
- ② 表面で示した「評価者」と同じアルファベット順でチームメンバーから「◎(妥当)」か「↑(数値を上げてもいい)」か「↓(もう少し頑張ったほうがよかったのでは)」で評価してもらいましょう。

数値 (4…はい 3…少しできます 2…少し自信がないです 1…いいえ)

	チーム学習の実践力	① 課題	③ 目標	⑤ 最終	評価者 (◎↑↓で評価)					
					A	B	C	D	E	F
例	自分をコントロールして冷静に振舞える	6	4	3	◎	↓	◎	↑	↓	◎
1	何事でも最後まで達成しようとする									
2	何事にも積極的に取り組める									
3	何事にも自信をもって取り組める									
4	物事を計画的に進めることができる									
5	物事を分析的に考えることができる									
6	物事を概念的あるいは抽象的に考えられる									
7	効率よく的を射た情報を収集することができる									
8	他の人を理解するように努めている									
9	他人とコミュニケーションをとることが苦痛でない									
10	他の人を説得したり影響を与えるように努めている									
11	チームワークを尊重しチームのために貢献できる									
12	まわりの状況を冷静に認識することができる									
13	自分をコントロールして冷静に振舞える									
14										
15										

最初の合計点



メンバーの意見をふまえて修正した合計点



修正後の合計点と該当する能力の内容を、資料 12-3 を見ながらレポートの表紙に入れてください。これがないと、**20 点減点**になります。

# 問題解決でのチーム学習と個人学習

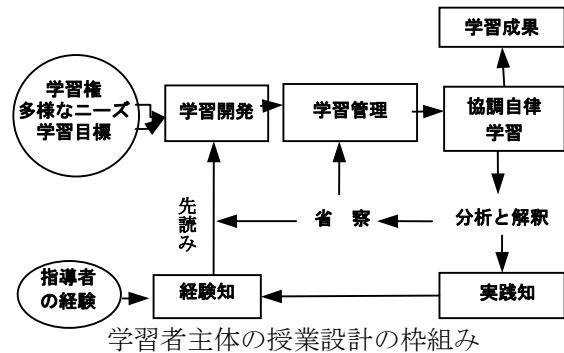
内容理解



## ●● この講座がどのようにデザインされているかを説明します

この授業は、皆さんがさまざまな学習ニーズをもって参加していて、教育に対する考え方もバラバラであることを前提として、学校教育が当面している問題を解決するためにチームで互いに協力しながら取り組むことを学んできました。教育問題はますます複雑になっているので、一人で解決できることはあまりありません。

チームや組織で取り組む必要がありますが、そのときにチームワークができる能力が求められています。そこでこの授業では従来のように教育目標や教育内容から設計するのではなく、学習権を認めてさまざまな学習ニーズに対応できるように、自分で決めた能力を習得できるような授業の実現を目指しました。これを協調自律学習と呼んでいます。この状況は右の図のように表現できるでしょう。このとき指導者すなわち教師の経験がきわめて重要です。



## 1. 授業の設計の枠組み

### 基本理念

(コンセプト)

授業で目指すものをお互いが理解できるように表現した短い文章。

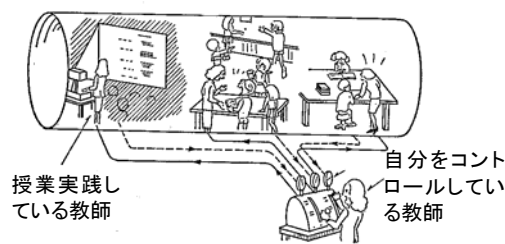
たとえば、お互いに協調して助け合いながら、主体的に学習し最終的には自律して学習することができるような授業を開発する。

### 学習テーマ

チームで取り組むテーマを学習する過程で、各自が自分で意識した能力を習得する。この授業では「未来の学校・園を構想し、そこでの基本的な能力を育成するための学習指導を展開する」をテーマにしている。

### 隠喩(メタファー)

これから開発しようとする授業はまだ誰も見たことがないのだから、よく知られていることに喩えて表現すると共通理解が得られやすい。この授業での学習者の変容を金工や木工のような加工技術ではなく、酒や醤油などの発酵のような自然の力を利用した醸造技術に喩えている。



醸造技術をメタファーとした授業過程

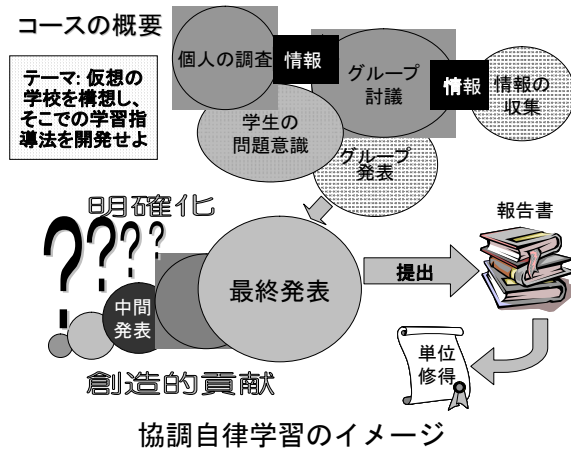
またチーム学習では機能不全のためにチーム体制がますます悪化してバラバラになるチームと、少し支援すれば学習が成立して順調に進行できるチームと、自律して学習できるチームとがでてくるが、これを落下傘から座布団型のパラグライダー、そして自由に飛べる翼型のパラグライダーへと革新的に進歩した例に喩えている。



落下傘      パラグライダー(座布団型)      パラグライダー

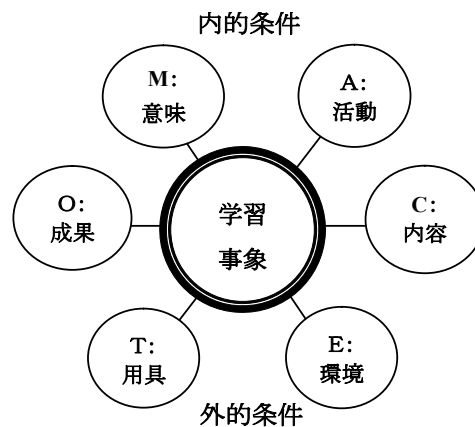
イメージ

具体的に学習の展開状況などを図式として表現したものである。まずチーム学習で中間発表を目指して、その後は協調自律学習として個人学習とチーム学習とを統合した形態で授業が進行する。その前提としては学生の問題意識を出発点として、チームでの討議や発表が進められ、最終的に報告書を作成することで単位を修得する。この授業を図式化したものが右の図である。



モデル

さらに具体的に授業を設計したり分析したりするための枠組みとなるものがモデルである。この授業では MACETO モデルと呼んでいるものを使用している。



授業設計のための MACETO モデル

## 命題

これは授業設計や実施のときに判断したことや、説明するための内容を短い文章として記述したもので、後から授業を修正したり、他の人が参考にしたりするときに参考になるものである。13-2-4の表にその例が示されている。

## 授業設計での判断命題の一部

自己評価ならびにチーム内での相互評価を信頼度の高いものにするためには、評価基準を明確に示して、長期にわたって評価を繰り返し実施して習慣化することが重要である。

「教える教育」においては教育目標と指導計画が重要であり、教育成果はテストによって評価され、「学ぶ教育」においては、学ぶ意味から出発し学習計画が重要であり、学習成果はポートフォリオによって評価されることを対比することは、両者の特徴を理解するのに有効である。

授業の最終目標を明確にするためには、最終のレポートのテーマと評価基準と評価方法をコースの早い時期に提示することが有効である。

方略A：学習内容と方法を学習者にまかせて自由度を大きくすると、学習成果(最終作品、報告書、レポートなど)は優れたもの(独創的な作品やレポートなど)と劣ったもの(おざりなレポートなど)との格差が大きくなる。

方略B：学習内容と方法の自由度を小さくすると平均的な学習成果が期待できるが独創的成果は少なくなる。

方略C：独創的な学習成果を期待しながら、劣った学習成果の数を少なくするためには、学習過程に特別の内容と方法の配慮が必要である。

評価対象となる最終レポートの作成を、教師への報告というよりも社会的に通用する報告書作りという枠組みで進めたほうが、レポート作成に真剣に取り組む。

学習設計の指導にあたっては、絵、イメージ、概念(キーワード)と図式表示、モデル化、仮説命題の生成という系列によって指導することによって、仮想授業の設計能力を形成することが可能である。

主体的学習を回復するためには、学習内容を習得するような授業(教科教育)の設計に先立って、主体的な学習活動が成立するような授業(調べ学習、総合的学習、あるいは学校行事など)の枠組みを適用することに集中するのが有効である。

この授業を設計するために、他にもたくさんのイメージやモデルを開発して使用していますが、これらの考え方は、組織シンボリズム論という理論に基づいています。しかし、実際の開発では授業の中に学習支援者が入って、学習活動などを記録し、そのような記録を分析することによって授業の問題点を見出して改善してきています。このように、学習者を中心とした授業が設計できるためにはいろいろな専門知識と能力と経験とが要求されますので、一朝一夕では実現しません。

## 2. 評価の考え方

この授業を通じてさまざまな評価を経験してきたと思います。これまで評価というと期末や学年末の試験で子どもや生徒を評価することだけを考えていたことでしょう。しかし実際には授業を良くするための評価や、学習を計画したり方向を修正したりするために学習者のための評価もあります。たとえばチーム学習への貢献については、教師が評価できるものではないし、またそれも意味がありません。チームの人たちがお互いに評価することがもっとも正しいのです。それがチームへの貢献だからです。そこで授業の評価活動に対する考え方を簡単に説明しましょう。

### ■ 指導者が学習者を見る視点

指導者がこの授業で提出された最終レポートを見ると、どの部分に注目しているかという、みなさんがレポートの表紙で示している目標レベルとチーム学習実践力の到達点です。それらは、みなさんがどのような学習成果を自分の力で展開したか、またどのくらい達成感を得たかということを重視しているからです。

### ■ 学習者が自らの学習を評価して公表する

チーム学習実践力の点数は、まさに自己評価です。ここに表れているものは、みなさんが自分の学習を振り返ってどれだけ達成感を得たのかということの主観的に数値化し、ともに学んできた仲間自己評価の妥当性を検討してもらったものです。

評価活動(evaluate)はもともと主観的なところがあります。この授業では、「頑張った」とか「興味関心をもって取り組めた」という達成感は、学習者自身の感情や価値観が伴うものですから、学習者の主観にかかわる評価は学習者に委ねています。なぜなら価値とは、価値観の持ち主の美・利・善の感覚に左右されるものであり※1、これを外部から評価することは困難だからです。

また、どのようなレベルの学習成果を目指すかということも学習者自身が決めることであると想定しています。目標レベルを提示してそこから選んだのは、いわば検定試験でどの等級に挑戦しているかを示していることと同じです。目標レベルを明らかにして最終レポートを提出するのはこのような評価の仕方を学ぶためです。指導者は、学習者が自分で示した目標レベルについて、指導者が設定している基準に基づいて条件に到達しているかを査定します。つまり、この講義における指導者の評価は、学習者が申し出た目標レベルと、学習者が到達している達成レベルとを比較して行われます。

※1・・・牧口常三郎 著 戸田城聖 補訂(1979)「価値論」第三文明社



# 学習成果の質保証とポートフォリオ

参考資料



●● この講座は「質保証」という捉え方で学習成果を評価しています

## 1. 学習成果になぜ質保証が必要か

流通部門のさまざまな業種で、生産者中心の生産から消費者中心の生産へと変化してきています。また病院でも医師中心から患者中心に変化してきています。教育の世界でも教師主導から学習者主体の教育へと変化していくでしょう。それは単に教育理念から見たときに学習者中心が望ましいというのではなく、情報社会の進展によって学習者が多様化してきて、教師の決めた教育目標だけでは対応できないので、そのように変化してきているということが出来ます。これまでの教育では、学校や大学などの教育機関で行われる学習を重視してきました。ところが情報通信技術の発達によって学校や大学などの教育機関の外部での学習活動がますます活発になってきています。いわゆる生涯学習社会の発達です。したがって学習成果をこれまでのように期末テストや入学試験の成績だけに求めることは困難になってきています。特にこれまでの大学は社会から隔絶することによって、社会の変化に影響されない独立した研究や教育ができると考えてきたので、日常生活から離れることが大学の自治であると考えられてきました。それにたいして情報化あるいは変動社会の進展は、大学に新しい役割を期待するようになりました。それは食料、環境、福祉などの日常生活にかかわることがらについての研究はもちろん、研修や講座などの啓蒙活動、そして優秀な専門家の育成や専門知識を常に新しいものにするなど積極的に役割を果たすことが期待されるようになったのです。現在はその過渡期にあり旧体制と新体制とが混在した形で進んでいるので、しばらくは混乱が続くでしょう。しかしやがては学習者中心の教育へと移行することは確実です。



## 2. どのように保証するのか

学習者中心の教育になったとき、学習成果は誰が評価するのでしょうか。これまでのように評価のすべてを教師が実施していたのでは十分に対応できません。いろいろな面を完全に把握することは不可能だからです。今回の学習でチーム学習の実践力を評価しましたが、これを教師が評価することは不可能です。たとえばコミュニケーション能力やチーム学習への貢献の度合いなどはチームメンバーが相互に評価することによってしか評価できません。そこでつぎのような命題が考えられます。

## チーム学習での能力はチームメンバーの協力を得なければ評価できない。

しかし、このような自己評価や相互評価が社会的に認められるためには、評価基準を明確にし、評価の過程を公開し、評価結果について第三者の意見が反映されるような構造になっていることが必要です。しかし他人の意見を待つというのも消極的で、さらに自律性を高めようとするとう評価結果にたいして社会的責任がとれるようにすることが大切です。そこで学習成果についての質保証ができるような制度が望まれます。そして何よりも評価結果はみなさんの努力成果を反映したものでなければなりません。

この授業では、自己評価や相互評価を繰り返すことによって、チーム内での評価の基準がなんとなく明確になりつつあることを感じたでしょう。このような自己評価や相互評価を小学校段階から重視して、それを国の評価制度に反映させようとしていることが、現在の教育研究の主要なテーマです。イギリスの全国共通カリキュラム(National Curriculum)での評価も教師の助言のもとに自分で決めたレベルに挑戦する方式を制度化した試験制度を採用しています。

以上のようなことから、学習成果の質保証としては

- ① レポートや作品などの個人学習の成果は自己評価を中心として集団でチェックする
- ② チーム学習の能力などの集団による学習成果は相互評価を中心に自己評価する
- ③ 学習成果の質を保証するために評価基準が明解で公開されている
- ④ 評価の手順が公開されていて、評価結果にいたる過程が再現できる
- ⑤ 自己評価や相互評価の結果が授業者や他の人々によって認定されている

以上のような手続きを経ることによって、学習成果を質保証(Quality Assurance)することができるでしょう。このように学習成果を適切に評価できることは、つぎの学習計画を立てるときに重要です。

### 3. 質保証とポートフォリオ

最近ポートフォリオということが聞かれるようになりました。これまでの学習で経験したように、学習成果はテストだけでできるものではなく、作品やさまざまな記録などによって個人の能力を判定することが大切になっています。〇〇大学出身ということが能力の質保証にならないことは社会でもしだいに認められるようになっていますが、それに代わって重視されてきているのは各種の資格検定の結果です。個人の能力は学年や出身学校あるいは出身大学で表現できないので、今後ますますこのような能力をあらわす指標が重要になります。このような個人の能力を表すさまざまなデータがポートフォリオです。

### 4. 本授業を設計しているときの仮説

- 仮説1 学習者の内的条件、すなわち学ぶ意味、達成感、充実感などを整えることに成功するならば、施設や設備などの外的条件が不十分であっても、その困難を克服して主体的に学ぶ。
- 仮説2 授業ならびにその学習成果については、共有ビジョン、メタファー、イメージ、モデル、命題などのシンボルの集合体として記述することができる。